

国語

(二) 科目 一〇〇分)

次の【文章Ⅰ】、【文章Ⅱ】は、いずれも鷗田清一「哲学の使い方」の一節である。これを読んで、後の問い(問1～9)に答えなさい。解答番号は①～⑮。

【文章Ⅰ】

哲学の「存在理由」がしばしば問題とされる。それも哲学の研究者によって。哲学の〈外部〉にとっては、哲学の「存在理由」は問題にならない。人びとの経験の奥深くにすでにしかとあるともいえるし、学科としての哲学が存在しなくても生きてゆくうえではなんの不自由もないともいえる。哲学の「存在理由」はつねに「学」としての哲学の可能性を考える哲学研究者が問題としてきたことだ。

さて、これまで哲学といういとなみがなされる場がどこであったかについて、もうすこし具体的などころから考えてみよう。学問としての哲学は現在、その大半が大学という機関のなかに囲われている。とすると、哲学の「存在理由」が問われるというのは、その大学のなかで哲学が場所を失ったということだろうか。それとも、哲学はそもそも大学のなかの一学科となることで、みずからの場所を棄てたということなのだろうか。いいかえると、大学という場所にあることは、そもそも哲学にとって幸福なことだったのだろうか。

哲学の〈場所〉、つまり、ひとはここで思考するののかという、思考の〈場所〉への問いが、おそらくはじめに立てられねばならないとおもわれる。

哲学の〈場所〉への問い。それは、大学という〈知〉の制度のなかで哲学が占める位置への問いであると同時に、どうかそれ以上に、〈知〉のトポスのなかで哲学といういとなみが占める位置への問いでもあった。そのような問いは、したがって、大学という制度の歴史への問いと、〈知〉(哲学と他の諸学問)の理念をめぐる歴史的反省とに、関係づけられねばならない。たとえば、デカルトでも用いられていた「知恵の木」(とくにその根)や「アルキメデスの点」というメタファー、知識の「建築術的統一」というカントの体系の理念、さらにはそれらと連動してきた《基礎づけ》とか《絶対的な知識》とか《普遍的な妥当性》という哲学の原理的な概念群が、哲学の〈場所〉への問いのなかでさしあたって問題とされるべきなのだろう。哲学は、知の空間のどこかにみずから位置づけようとはしないで、むしろもろもろの知がそのなかに配置されている空間(の存在)そのものを問題とするとされてきたからである。そして二十世紀ほど、哲学がその「存在理由」をみずからに厳しく突きつけた時代はこれまでなかったよう

におもわれる。

およそ思考というものは、それが機能不全に陥ったときにみずからの媒体について思考をはじめのがつねだが、それは哲学が二十世紀に《普遍学》もしくは《基礎学》という輝かしき企てそのものの不可能性という事態に直面したということでもある。これは、谷川雁がかつて詩の終焉について語った言葉を借りていえば、次のような状況に置かれているといえるのではなからうか。

詩がほろんだことを知らぬ人が多い。いま書かれている作品のすべては、詩がほろんだことのおどろきと安心、詩がうまれないことへの失望と居直りを、詩のかたちで表現したもののという袋のなかに入れてしまうことができる。もちろん、そのなかにはある快感をさそうものがないではない。しかし、それはついに詩ではない。詩それ自身ではない。そこには一つの態度の放棄がある。つまり、この世界と敷衍(ていつん)のことは天祥(てんしょう)にかけられてゆらゆらする可能性を前提にするわけにいかなくなっているのである。

(「暖色の悲劇」一九六五年)

哲学の「危機」をこのようにみずからの可能性の根源に立ち返って考える必要はたしかにある。その「危機」の意味が、学問論的にさらに問いつめられねばならないからだ。

しかしひるがえって考えてみるに、《哲学の危機》がまるで《世界の危機》と一体のものであるかのように意識できたのは、哲学者の最後の幸福な錯誤だったのかもしれない。「一、いかなる点で哲学は現在その最終段階にさしかかっているか? 二、哲学の終わりにあたって、いかなる使命が思惟のためになお保存されて残っているか?」(ハイデッガー)、このような問いがユネスコ会議への報告書(哲学の終わりと思惟の使命「一九六四年」)のなかにキサイされ、それが哲学の国際シンポジウムのなかで代読されるような時代は、ひょっとしてまだまだ幸福な時代だったのかもしれない。哲学が、その可能性そのものにケンギをかけたなり――真なるものの規準を提示するという伝統的な課題そのものへの懐疑である――、言語や身体、伝統、生活世界といった、かつて哲学的反省にとって不純な契機として排除されてきた思考外の諸対象をこんどはみずから可能にしている媒体として改めて吟味しはじめたりしながら自己の存在に批判的にかかわってゆくことこそ、哲学の危機のチョウゴウでもあるといえないか。胃の存在、あるいは言葉の存在は、それがうまく機能しなくなったときにはじめて意識されるからである。

しかしさらに重要なのは、哲学が〈反省〉という形式をもつ「わたしの思考」(cogito)の仕事とみなされることによって、それがだれの前で、だれに対してなされるものかという問いを、じぶんたいして立てなくなつたのではないか、という哲学者の自問であらう。哲学の「存在理由」を問うにあたっては、まずそのこと^ウから考えはじめる必要があるようにおもわれる。

しかし、これはまだ「学問のなかの学問」としての哲学の話である。これに対してはすでに見たようにもう一つ、別の考え方がありうる。それは、哲学というものは、最終的に、たんなるアカデミックに確実な知であることではなく、「よき生」というもののへのきわめて「プラクティカルな問いへと収斂するものだ」という考え方である。ここでは哲学は一つの生き方をこそ意味する。哲学とは「哲学的な生」のことにはかならないというこの考え方をきっぱり否定する人たちが哲学研究者たちのあいだにはすくなくあらずいとしても、他方にそれを哲学の最終到達点と考えている人もまたたしかにいた。そしてそのような人たちにとっては、哲学が、ほかならぬ「理論のなかの理論」、「もともと純粋な理論」のモデルになっていることそのことが、すでに哲学にとって由々しきことなのである。というのも、理論は実践ないしは応用の対項としてあり、実践的なことがら、もしくは価値的なことがら、つまりはイデオロギーや価値観に関与しないことこそが、理論を純粋にするのだと考えるかぎり、哲学は実践的ではありえなくなるからだ。テオリーア（観想）こそが行ないのなかの行ないであるとする、そういう理解とは正反対の理解が近代における理論概念にはつきまといってきた。純粋≠実践的な理論の典型として哲学が考えられてきたのである。

哲学が「純粋な理論」となることにともなう、実践的問題へのそうした閉鎖は、いうまでもなく、「価値中立性」だとか「没価値性」を標榜する客観主義的な学問理解、ならびに「基礎学」としての哲学の自己理解と切り離しては考えられない。近代的な学問理念を長らく枠どってきた諸々の概念の二項対立的な構造、とりわけ理論／実践、事実／価値、存在／当為、記述性／規範性、合理性／情緒性、公共性／私秘性といった対立の前項を重ねあわせるところに、近代の、とりわけ実証主義的な学問理念が浮かび上がってくる。すると、それに対応して実践的なことがらは、いきおいこれらの概念対立の後項をつなぎあわせたところに成り立つことになる。「普遍的な妥当性」が「客観性」に肩代わりされることによって、実践的に普遍的なことがらはその固有の場所を奪われ、主観的・相対的なことがらへと転落させられる。存在は道德外的な事実としてその価値的性格を剥がれ、知者はかならずしも賢者でなくなったのである。

そのうえで、わたしたちはもう一度問う必要がある。哲学がそのように失力したのは、哲学的思考が、だれの前で、だれに対してなされるものかという問いを、じぶんに対して立てなくなったからではないのか。と。哲学者は、哲学の外部をこそもつと意識する必要がある。哲学の「存在理由」を問うのなら、それはまさきき哲学の外にいる人たちによって問われるべきである。いうまでもなく、この「外」は大学の外部、哲学研究者集団の外部という意味ではない。哲学はどこまでも「メタ」という次元を含む。何かへの問いは、その問いそのもののへの問いを自己言及的に含んでいなければならないという意味である。批判は自己批判を内包していなければならないのである。その自己吟味が、哲学においては論理学であり、認識論であり、言語分析であった。そしてその「メタ」というのはどういう場所なのか、それが問題なのであ

る。

〔注〕 * トボス……ギリシヤ語で「場所」を意味する言葉。

* 「知恵の木」……デカルトが哲学体系を一本の木にたとえたもの。根を形而上学、幹を自然学、枝を医学・機械学・道德の三つとした。

* 「アルキメデスの点」……アルキメデスが地球をてこで動かすための支点を求めたことになぞらえた表現で、思想体系の拠り所、要となる概念のこと。

* プラクティカルな……実用的な。実践的な。

【文章Ⅱ】

〔外部〕といえは、カントに哲学研究者ならだれもが知っている有名な文章がある。

通常の人間理性はこの羅針盤を手にとって、それが現実に出会うすべての場合に、（……）何が義務にかなないが義務に反するかを、区別するべきことをよく心得ており、その際こちらから通常の人間理性に何か新たなことを少しも教える必要はなく、ソクラテスが昔たように、理性をして理性自身の原理に注意させるだけでよいということ。したがってまた人は正直でセンリョウであるために、それどころか賢明で有徳であるために、何をなすべきかを知るのに、学問も哲学も全く必要とせぬということ。（……）通常の悟性は、哲学者と全く同様に正しい理解に到達できるという抱負をもつことができるのであり、それどころか、この点では哲学者自身よりも確かだとさえいえるほどなのである。（……）それゆえ、道德の個々の問題については、通常の人間悟性だけで十分だと考え、哲学をもち出すのはたかだか道德の体系をいつそう完備したわかりやすい形で、かつ道德の規則を適用のために（……）便利な形で、示すただけに限り、実践的見地で通常の人間悟性をその幸福な素朴さから離れさせ哲学により探究と知識獲得との新たな道に向かわせようなどとすることはやめたほうがよいのではないかと思われる。

（「人倫の形而上学の基礎づけ」、野田又夫訳）

何をなすべきかを知るのに、学問も哲学も必要ないということ、カントのこの考えはまた別のかたちでも表明されている。たとえば、『純粹理性批判』で「世界概念の哲学」——「世界概念」とは「だれもが関心をもちたずにはいられないようなことがらに関する概念」のことである——と「学校概念の哲学」との区別に注意を促している箇所である。ここでカントは、「哲学は（哲学に関する）歴史的な知識でない（かぎり）けつして学びうるものではないのであって、理性に関して言えば、せいぜい哲学すること（Philosophieren）を学ぶことができないにすぎない」と書いている。このPhilosophierenに関しても、まさにこのPhilosophierenが大学や学会といった研究機関のなかに制度化されることによって、それじたいとしては非研究者にた

いして閉ざされてしまったのではないか、いいかえると哲学がだれに対して語りかけられるのかをみずから問わなくなったのではないか、そのことがここで問われねばならないのである。哲学が思考のテクノロジーや哲学についての歴史的・文献学的な知識になってしまえば、以後、哲学研究者はアドルノのいう「哲学の寮監」——哲学の門前で人びとに哲学の学寮に入る資格があるかを厳しく問う監督者——に、あるいは哲学の官僚か技術管理者になってしまわざるをえないのではないだろうか。

(本文中に一部省略・改変したところがある)

問 1 二重傍線部 A～E に相当する漢字を含むものを、次の各群の ①～⑤ のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は ① ⑤。

A オク ①

① 壁を強くオウダする。

② キョウオウに隠した本心。

③ 船でトオウする。

④ 食欲がオウセイだ。

⑤ キオウの事例にもとづく。

B キサイ ②

① テイサイを整える。

② 森林をバツサイする。

③ 積み荷がマンサイの車両。

④ 返答をサイソクする。

⑤ セイサイに記録された資料。

C ケンギ ③

① チュウヤケンコウで作業する。

② ケンメイに説得する。

③ 土地のケンリを譲渡される。

④ ケンアくなムードが漂う。

⑤ 蛇蝎のごとくケンオする。

D チョウコウ ④

① 文学賞のコウホに選ばれる。

② コウザイ相半ばする。

③ オウコウキゾクの生活に慣れる。

④ コウジョウ的な人手不足。

⑤ 農地をコウサクする。

E ゼンリョウ ⑤

① 古い建物をシュウゼンする。

② マンゼンと一日を過ごす。

③ クウゼンゼツゴの状況に陥る。

④ ドクゼンの考え方。

⑤ ゼンブクの信頼を寄せる。

問 2 傍線部「思考の〈場所〉への問い」とあるが、この「問い」の内容として適当なものを、次の ①～⑦ のうちから二つ選びなさい。解答番号は ⑥・⑦。

① 哲学の存在理由を担保する〈知〉の制度としての大学への問い

② 〈知〉の空間そのものにおける哲学の位置づけへの問い

③ 万人が学ぶ学問としての哲学の存在意義についての問い

④ 哲学を《普通学》・《基礎学》に位置づけるといふ企てへの問い

⑤ 大学という制度において哲学が置かれている〈場所〉への問い

⑥ 大学という機関のなかの一学科についての問い

⑦ 〈知〉のトポスに対する哲学の反省という問い

問 3 傍線部「谷川雁がかつて詩の終焉について語った言葉を借りていえば」とあるが、谷川の言葉は、どのようなことを示すために引用されたと考えられるか。最も適当なものを、次の ①～⑤ のうちから一つ選びなさい。解答番号は ⑧。

① 詩が機能不全に陥ったときに詩のかたちで表現した言葉を疑ったように、哲学もみずからの可能性を見失ってきているということ。

② 「世界と数行のことば」とを「天秤にかける」ことで可能性を探った詩のように、哲学の「危機」に対して、哲学の可能性に立ち返って考える必要があるということ。

③ 当時の「詩」は「詩」そのものではないといえるのと同じように、二十世紀の哲学も《普通学》もしくは《基礎学》という自身の機能が揺らいでいたということ。

④ かつて詩が本来のかたちを放棄したためにぼろんでしまったのと同じように、二十世紀の哲学も、学問としての機能が揺らぐ状況にあったということ。

⑤ 当時の詩が詩としての態度を放棄した状態になっていったように、二十世紀の哲学も自身の媒体を思考の対象とする機能不全に陥っているということ。

問 4 傍線部「そのこと」とあるが、この内容の説明として最も適当なものを、次の ①～⑤ のうちから一つ選びなさい。解答番号は ⑨。

① 哲学が力を失ったのは、哲学が〈反省〉という他者不在の思考を、自己との閉じた関係のなかで行うことに終始し、他者との対話的な知を求めなくなったことが大きいということ。

② 哲学の「存在理由」が問題とされるのは、哲学的思考がだれのために、何のためになさ

れるべきであるかということ、哲学者自身が真剣に考えなくなったことが関係しているということ。

③ 哲学が大学という研究機関のなかで大きな位置を占めたために、哲学がだれに対して語りかけるものであるのかを哲学者が自問しなくなったことが、哲学の危機を物語っているということ。

④ 哲学が「反省」という形式を重視しているにもかかわらず、それがうまく機能していないのは、哲学的思考がだれの前で、だれに対してなされるものかを明確にしていなかったらであるということ。

⑤ 哲学が「危機」にあるといえるのは、哲学者が「外部」を気にしすぎて、人間の経験のなかに確実に存在している哲学の「存在理由」を自問しなくなったことによるということ。

問5 傍線部エ「哲学にとって由々しきこと」とあるが、なぜ「由々しきこと」だということか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は

10。

① 意味や価値を問う哲学は「よき生」への実践的なアプローチとなるのに、生き方と切り離せない価値観やイデオロギーを排斥した単なる理論として扱われているから。

② 本来、哲学ではテオリア（観想）こそが行いのなかの行いとされているが、近代における哲学は、そういう理解とは正反対の机上の学問にすぎなくなっているから。

③ 哲学を「理論のなかの理論」「もつとも純粋な理論」のモデルと考えると、哲学は哲学者だけのものになってしまうが、本来は万人に開かれるべきものであるから。

④ 哲学は「哲学的な生」のことにはかならないと考える人たちにとって、哲学をきわめてブラックティカルな問いだと考えることは、哲学を貶める行為にはかならないから。

⑤ 哲学は一つの生き方をこそ意味するという考え方を否定する人たちは、「理論のなかの理論」を哲学の最終到達点と考え、理論を純粋化することを重要視しているから。

問6 傍線部オ「哲学者は、哲学の外部をこそもつと意識する必要がある」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。

解答番号は 11。

① 哲学者ではない外部の人びととともに哲学について考えることで、哲学を離解なものにとらえる傾向を変え、哲学の再生を目指すべきだということ。

② 哲学以外の学問についても研究することで、他の分野の人びとと連携し、現代に特有の問題を解決する方法を模索していくべきだということ。

③ 哲学についての問いを自分に対して立てることを意識し、論理学、認識論、言語分析の観点から複合的に自己吟味を怠らないようにする必要があるということ。

④ 批判的思考である哲学は、問題を一つ上の視点や外側から眺め、より本質に近づきな

がら自己の立場をも客観的に把握しなければならないということ。

⑤ 大学の外部へと出ていき、市井の人びとと広く交流を図ることで、哲学者と一般人の間の認識の違いを解消していかなければならないということ。

問7 傍線部カ「哲学の寮監」とあるが、これはどのようなことをたどったものか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 12。

① 人が何をなすべきかを知るうえで学問は必要なのに、知識の獲得を強制すること。

② 悟性は人を哲学者と同様に正しい理解に到達させるという事実を認めないこと。

③ 哲学の歴史的・文献学的研究に従事したのみで、哲学を学んだ気になること。

④ アカデミズムの内部に収まらない広がりをもつ哲学を、研究の場に閉じ込めること。

⑤ 哲学を究めるには、哲学者の視点から知識を深めるべきだと主張すること。

問8 次は「文章Ⅱ」について話し合った授業の様子である。先生の問いかけに対する答えとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 13。

先生 カントの文章の引用中に、「理性」や「道徳」が出てきますが、これと「哲学」はどう関係すると思いますか。【文章Ⅰ】の内容も踏まえて考えてみましょう。

① 生徒A：道徳の個々の問題は、「通常の人間悟性だけで十分だ」と書いてあるので、道徳と哲学とは、掘り所にしているものが違うということだと思います。【文章Ⅰ】を読んでも、哲学は学問になりませんが、道徳は学問にならないと言っているのではないで

しょうか。

② 生徒B：私は「この点では哲学者自身よりも確かだ」と書いてあるのが気になりました。哲学はむしろ、道徳とはかけ離れたものなのだと思います。【文章Ⅰ】を読んでも、哲学は思考の方法を説くもので、道徳は行動の指針となるものという違いがあると言えるのではないで

しょうか。

③ 生徒C：哲学は「道徳の規則を実用のために」示すものと書いてあるので、哲学は道徳よりも理論的なものだと思います。【文章Ⅰ】を読むと、筆者は本来哲学とは生き方につながるものだと考えています。つまり哲学は道徳心を導くためのものなのではないで

しょうか。

④ 生徒D：「何をなすべきかを知るのに、学問も哲学も全く必要とせぬ」と書いてあるので、カントは道徳の実践には哲学は不要だと考えているといえます。【文章Ⅰ】にある、哲学が理論としての純粋さを求めることで実践的問題からかけ離れていくことへの問題提起とつながる考え方ですね。

⑤ 生徒E：理性は「何が義務にかなない何が義務に反するか」を区別するすべを心得ていると書いてあるので、哲学によってさらに理性を磨くことが、人間社会の秩序を守るということだと思います。【文章Ⅰ】で、哲学の存在理由を問うていることから、哲学は道徳の土台となるものなのですね。

問 9 波線部「大学」という場所にあることは、そもそも哲学にとって幸福なことだったのだろうか」とあるが、筆者がこのように言う理由の説明として適当なものを、次の①～⑥のうちから二つ選びなさい。解答番号は 14・15。

① 哲学が大学という機関のなかに取り込まれたことで、真なるものの規準を提示するという哲学の伝統的な課題そのものが機能しなくなったから。

② 哲学が大学という場所にあることで、哲学の歴史や文献学的知識を学ぶことが主眼となり、生き方への問いとしてのあり方を失いかけていくから。

③ 哲学が大学という知の空間に囲い込まれたことで、哲学の存在理由が哲学の研究者から問題とされることがなくなってしまうから。

④ 哲学が大学という〈知〉の制度のなかに置かれたことで、哲学の実証主義的な学問理念がその真価を発揮する機会を失ってしまったから。

⑤ 哲学が大学の一学科として位置づけられたことで、諸学の根底にある哲学的思考が否定され、学際的研究が行われなくなったから。

⑥ 哲学が大学で扱う「学問」になったことで「純粋な理論」の典型として考えられるようになり、哲学的思考の対象を見失った文献学的な知識となったから。

一一 次の【文章Ⅰ】、【文章Ⅱ】は、いずれも平野啓一郎『本心』の一節である。舞台は近未来の日本。ただ一人の家族である母が事故で急逝し、寂しさに耐えられなくなった「僕」(石川朔也)は、母の VF (ヴァーチャル・フィギュア) を製作するため、フィディテクス社の野崎のもとを訪れた。これを読んで、後の問い(問 1～7)に答えなさい。解答番号は 16・31。

【文章Ⅰ】

体験ルームは、意外と平凡な応接室だったが、外部からは遮蔽されていて、壁には闘牛をモチーフにしたピカソのエッチングが飾られていた。かなり古色を帯びていて、しみもある。最近の精巧なレブリカなのか、二十世紀に刷られたものなのかは、わからなかった。

ヘッドセットを装着しても、何の変化もなかった。僕は、これから対面する VF が、AR 方式で、現実には追加されるのか、それともヘッドセット越しに見ている部屋が、既に仮想的に再現された応接室なのか、本当に区別できなかった。

黒いレザーのソファの前には、コーヒーが置かれている。座って、それを飲めば、わかることだろうが。……

野崎が、二人を連れだって戻ってきた。

一人は、薄いピンクの半袖シャツを着た、四十前後の瘦身の男性。よく日焼けしているが、僕とは違い、長い休暇中に、ゆっくり丁寧に時間をかけて焼いたらしい肌艶だった。

もう一人は、紺のスーツを着て、眼鏡をかけた白髪交じりの小柄な男性だった。

「初めまして、代表の柏原です。」

日焼けした男の方が、白眼よりも更に白い歯を覗かせて腕を伸ばした。

僕は握手に応じたが、ウィンド・サーフィンでもやっているんだろか、といった眩しい想像を掻き立てられた。

続けて、隣の男性を紹介された。

「弊社でお手伝いいただいている中尾さんです。」

「中尾です。どうぞ、よろしく。暑いですね、今日は。——お手伝いと言っても、ただここでお話をさせていただきただけなのですが。」

彼は、額に皺を寄せて、柔和に破顔した。落着いた物腰だったが、こちらの人間性を見ているような、微かな圧力を感じさせる目だった。「お手伝い」というのがよくわからなかったが、僕と同じ VF の製作依頼者なのだろうかと思った。

同様に握手を求められたので、応じたが、その刹那に、ハツとして手を引つめた。実際には、それも間に合わず、僕は彼に触れ、しかも、その感触はなかったのだった。

「私は、VF なんです。実は四年前に、川で溺れて亡くなっています。娘がこの会社に依頼して、私を製作してくれたんです。」

僕は、物も言えずに立っていた。本物そっくり、というのは、CG でも何でも、今は珍しくないが、中尾と名乗るこの VF は、何かが突き抜けていた。それが、僕の認知システムのどこをどう攻略したのかはわからない。誇張なしに、僕には彼が、本当に生きている人間にしか見えなかった。柏原と見比べても、質感にはまったく差異がなかった。

僕は、半ば救いを求めるように野崎を振り返った。彼女は特に、「どうです!」と誇らしげな様子を見せるわけでもなく、「気になることがあれば、何でも質問してみてください。」とやさしく勧めた。恐らく、彼女が VF に接する態度も、これを人間らしく見せている一因だろう。

彼の額に、うっすらと汗が浮いているのに気がついて、僕は驚いた。僕の眼差しを待っていたのか、それは、目の前で、静かにしずくになって垂れ、こめかみの辺りに滲んで消えた。そのベタつくような光沢を、中尾は痒そうに、二、三度、掻いた。

僕は、反射的に目を逸らした。彼の足許には、僕たちと同じ角度で、同じ長さの影まで伸びていた。

「ちゃんと、足は生えますよ。」と中尾は愉快そうに笑って、「そんな、幽霊を見たいな顔をしなさい。」と、腹の底で響いているような鈍太い声で言った。

「すみません、……あんまりリアルなので。」

「中尾さんは、実は収入もあるんですよ。」と野崎が言った。

「——収入ですか?」

「これが仕事なんです。」と中尾が自ら引き取った。「ここであらうして、自分自身をサンプル

に、新しいお客様にVFの説明をしているんです。それに、データの提供も。お金を受け取るのは、家内と大学生の一人娘ですがね。……かわいそうなことをしましたから、まあ、親として出来るせめてもの孝行ですよ。」

そう説明する彼の目には、憂いの色があつた。しかも彼は、「親として出来るせめてもの孝行」と言うだけでなく、その手前で、「まあ」と一呼吸置いてみせたのだった。

僕は、自分の方こそ、出来の悪いVFにでもなったかのように、不明瞭な面持ちで立っていたと思う。「話しかければ、非常に自然に受け答えをしてくれます。ただ、心はありません。」という、野崎の最初の説明が脳裡を過つた。

彼はつまりAI（人工知能）で、その言葉のすべては、一般的な振る舞いに加えて、彼の生前のデータと、ここでの、何十人だか、何百人だかの新規顧客との会話の学習の成果なのだった。ただ、「尤もらしい」ことを言っているに過ぎず、実際、こうしたやりとりは、大体いつも、似たり寄ったりなのだろう。

第一、それを言うなら、柏原や野崎の言動こそ、僕が誰であろうと、そう大して変わらない、パターン通りの内容だった。彼らとて、一々、僕の心を読み取り、何かを感じ取りながら話しているわけではなく、「統語論的に」応対しているだけに違いない。

「お母様を亡くされたと同つてます。きっと、あなたのお母様も、私と同じように、VFとして立派に再生しますよ。娘はね、私と再会した時、本当に涙を流して喜んでくれました。もちろん、私も泣きましたよ。——心から。」

僕は、中尾の姿に母を重ねようとした。しかしそれは、どう努力しても止めることの出来ない、破れやすい、儚い幻影だった。それでも、母とまた、こんな風に会話を交わす日が来るという期待は、僕の胸を苦しみとしか言いようのない熱で満たした。

わかつた上で欺されることを、やはり欺されると言うのだろうか？ もしそれで幸福になれるなら、僕は絶対的な幸福など、夢見てはいない。ただ、現状より、相対的に幸福でさえあるなら、残りの人生を、歯を喰ひ縛つてでも欺されて過ごしかねなかった。

その後、ソファに座つて、面会の続きをしたが、僕はほとんど上の空で、話の半分程度しか頭に入らなかった。

ヘッドセットを外した途端、VFの中尾は目の前から消えた。しかし、僕の中に残った、人と会つたという余韻は、実のところ、代表の柏原よりも、遥かに彼の方が強かった。

（注）*野崎……「僕」の担当になったフィディテックス社の社員。

【文章Ⅱ】

〈母〉は、授業参観にでも来たかのような佇いで、僕を背後から見つめながら立っていた。

ブラウンに染めた髪も、歳を取って丸みを帯びた肩も、普段着にしていた紺のワンピースも、何もかもが同じだった。

「呼びかけてあげてください。」

野崎の声が聞こえた。普段の仕事で、依頼者の指示を受けた時のような錯覚に陥った。けれども、僕はしばらく、声が出なかった。野崎に見られているという意識もあったが、それだけではなかった。

母への呼びかけ以外には、決して口にしたことのなかった「お母さん」という言葉を、母のニセモノに向けて発しようとすることに対し、僕の体は、ほとんど詭譎するように抵抗した。それによつて、ニセモノになるのは、お前自身だと言わんばかりに。

僕は死後の生を信じないが、もし僕が先に死んで、母が僕ではない誰か——何か——に、「朔也」と呼びかけているのを目にしたならば、いたたまれない気持ちになるだろう。

それでも、結局、僕は呼びかけたのだった。恐らくは、やはり野崎から見られていて、〈母〉から、待たれて、いると自覚したから。

「——お母さん、……」

それは、驚いたように目を睜がした。僕は股慄した。固唾を呑んで、その顔を打ち目守った。

「朔也、今日はお仕事は？」

「……」

「どうしたの、そんな顔して？」

僕は、何者かに、不意に、背骨を二、三個打ち抜かれたかのようにその場に崩れ落ちてしまった。蹲つて、僕は泣いた。涙を拭おうとして、ヘッドセットに手がぶつかると、フィディテックスの応接室の床が直に見えた。

「どうしたの？ 体調が悪いの？ 救急車、呼ぶ？」

僕は首を横に振つて、一息吐くと、両手で膝を押しながらゆっくりと立ち上がった。そして、「大丈夫。」と言った。

恐らく、同意すれば、本当に救急車を呼ぶ仕組みにでもなっているのだろう。そうした思考が、僕に落ち着きを取り戻させた。それに、いきなり救急車を呼ぶというのは、母の言いそうにないことだった。

「石川さん、違和感がある時は、『お母さん、そんなこと、言わなかったよ。』と注意してください。『前はこう言つたよ。』と訂正してあげれば、それで、学習します。そのきっかけの文言も、仮にこちらで設定したものですので、ご自由に変更できます。一度、試してみてください。」

僕は、言われた通りに注意をして、「前は、『大丈夫？』って言つたよ。」と語りかけた。〈母〉は、少し考えるような表情をして、「そうだったわね。」と微笑した。

そこまでやりとりしたところで、僕は、助けを求めて野崎を探した。

「画面の右上に触れてください。特に何も印はありませんが、そこに腕を伸ばしてもらえれば、終了になります。」

言われた通りにすると、視界が閉ざされ、やはり少ししてから最初の画面に戻った。

僕は、会話の途中で切断され、闇の中に取り残されてしまった〈母〉のことを心配した。「朔也?」と、先ほどとは逆に、〈母〉が僕を捜して呼びかけている。——その姿を思い浮かべると、胸が痛んだ。それは、自然に起こった感情だった。

ヘッドセットを外すと、また母のいない元の応接室に戻っていることの実感を感じた。あまり夢中になったことはないが、仮想空間には、僕も折々、出入りしている。しかし、他人に見られている場所で〈母〉に会うという状況は、自室で気晴らしに冒険的な世界に乗り込んでいくとは、まるで違っていた。

問 1 二重傍線部 A～E の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の ①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は 16 ～ 20。

A 破顔した 16

① 晴れやかな顔になった

② 顔をほころばせた

③ 声を上げて笑った

④ 微笑をたたえていた

⑤ 穏やかな表情を見せた

B 脳裡を過った 17

① いやな予感につながった

② 記憶に焼き付いていた

③ ふと思いついた

④ ずっと気にかかっていた

⑤ 一瞬間こえた

C 歯を喰ひ縛って 18

① 限界を迎えて

② ひたすらに力を込めて

③ できるだけ努力して

④ 必死に耐えて

⑤ 無力さに抗って

D 詰難する 19

① 思い悩む

② 答める

③ 歯向かう

④ 逃げる

⑤ 焚きつける

E 股慄した 20

① 恐ろしきで足が震えた

② 悔いて突っ立っていた

③ 思わず身震いをした

④ 怖じ気づいて弱腰になった

⑤ 緊張で体がこわばった

問 2 傍線部 A「ハッとして手を引つ込めた」とあるが、その理由として最も適当なものを、次の ①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 21。

① 中尾に握手を求められたため、何気なく応えようとしたが、中尾が VF であることを思い出してあわてたから。

② 「お手伝い」とはということかがわからなかったが、握手をしようとしたことで、その意味がわかったから。

③ 何の疑いもなく中尾の手を握ろうとしたその時に、その手が、本当は中尾のものではないという事実を知ったから。

④ 自分の手が中尾の手に触れる寸前に、中尾は VF なのではないかという不信感が、一瞬間をかすめたから。

⑤ 中尾が差し出した手に触れようとしたその瞬間に、感覚的に中尾が生身の人間ではなく VF であると察知したから。

問 3 傍線部 I「僕は、反射的に目を逸らした」とあるが、「目を逸らした」理由の説明として最も適当なものを、次の ①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 22。

① 中尾と会話をしていると、あまりにリアルすぎてどうしても VF と信じられず、生きている人間でなければ幽霊に違いない気がして、自分の目で足もとの影を確かめずにはいられなかったから。

② 中尾がどこからどう見ても生きている人間としか見えずに衝撃を受けているところへ、さらに汗という生命を物語る現象を目にして、自身の理解の範疇を超える存在を直視していられなかったから。

③ VF を人間らしく見せるために、見た目や表情だけでなく、汗まで作りこむという演出をやり過ぎだと感じ、フィディテックス社のやり方に不満を覚えたことを、野崎らに表情から悟られたくなかったから。

④ 生身の人間の仕種^{ししゅ}であれば何ということもないが、汗のあとを痒そうに掻くという自然な動作がかえってVFの不自然さを強調しているようで、VFはしよせん偽物だと思いき知らされたから。

⑤ 目の前にいる中尾が、自分と同じように親を亡くした娘さんが製作を依頼したVFだと聞き、自分の母もこんなまでリアルに蘇^{よみがえ}るのかと思うと、驚くと同時に畏怖の念が込み上げてきたから。

問4

傍線部ウ「僕は、自分の方こそ、出来の悪いVFにでもなったかのように」とあるが、この時の「僕」の心情として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は ㉔。

① 親である中尾が、娘に対して「孝行」という言葉を使うことの違和感と、自然な口調でそれを語る様子とのギャップから、彼の発言はAIが組み立てた言葉であるということをやっと理解し、その事実にはショックを受けている。

② 母親のVFの製作を検討している顧客に「せめてもの孝行」という言葉を聞かせることで購入を促そうとする中尾の抜け目のなさを感じ取り、このやりとりはあくまでも企業によって操作されたものだとして初めて思い知らされている。

③ 憂いを帯びた表情と完璧な話し方で親としての心情を語る中尾のVFも、「孝行」という言葉の使い方を間違えるのだということを目の当たりにしたことで、VFには「心」がないのだということは今更実感し悲嘆している。

④ 中尾が用いた娘と自分の立場の逆転を踏まえたかのような「孝行」という言葉や、心情を表出したかのような表情の変化や物言いが、「心」がないと聞いていたVFによって自然になされていることを受け止めきれず、動揺している。

⑤ 中尾は、AIが学習したことを尤もらしく言っているだけなのだと知りつつも、「孝行」という言葉を自嘲気味に使う様子に人間らしさを感じさせられたことで、亡き母との会話が叶うことへの期待で頭がいっぱいになっている。

問5

傍線部エ「相対的に幸福」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は ㉕。

① 母が生きていることと同じ毎日を送れること。

② 現実より仮想現実の中に本当の幸せを求めること。

③ 母の死を巡る後悔から解放されて暮らせること。

④ 母のいない寂しさがほんの少しでも紛れること。

⑤ 亡き母がVFとして立派に再生すること。

問6

傍線部オ「僕はしばらく、声が出なかった」とあるが、その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は ㉖。

① 生前の姿そのままの母が目の前に現れたため、なつかしさといとおしさに胸がいっぱ

いになってしまったから。

② 野崎から「呼びかけてあげてください。」と声をかけられたが、何について呼びかけたらいいかわからなかったから。

③ ようやく金銭の母との対面の日を迎えた「僕」が喜ぶことを、野崎が期待して待っていると感じたから。

④ 母その人ではなく母の虚像にすぎないものを「お母さん」と呼ばなければならないことに、幻滅したから。

⑤ VFに対して「お母さん」と呼びかけることは、本物の母に対する冒瀆^{ぼうとく}のような気がして、ためらわれたから。

問7

「僕」の母親について、【文章Ⅰ】のX……では「母」と表記されているのに対して、【文章Ⅱ】のY……では「(母)」と表記されている。これについて六人の生徒が話し合った。次の①～⑥の発言について、内容が適当なものには①を、適当でないものには②を選びなさい。解答番号は ㉗～㉚。

① 生徒A：Xは、まだ母親のVFが存在しない段階だから、亡くなった本物の母という意味で「母」と表記し、「(母)」はその母親のVFだから、「(母)」と表記している。「僕」の中では人間かVFかという点で別の存在なんだ。

② 生徒B：「母」は「僕」の記憶の中の母親だね。一方でVFの「(母)」はAIが生前の母親のデータを学習して生まれたものだ。「僕」は、外見は同じでも「母」と「(母)」の自身は違うととらえているようだ。

③ 生徒C：VFの「(母)」は、「救急車、呼ぶ？」と言うなど、生前の「母」とは違う点があるけれど、学習によってこれを修正するともある。これから「母」になる過程の未完成の存在という意味でも、「(母)」と示されているんだ。

④ 生徒D：「僕」は「(母)」が僕を捜して「いる姿を想像して胸を痛めている。心情としては、VFの「(母)」と生前の「母」を重ね合わせてとらえているね。「(母)」も、「僕」の中の愛着を呼び起こすという点では、「母」と同じだといえるね。

⑤ 生徒E：「僕」は目の前に現れたVFの「(母)」の存在を受け入れられないでいるね。さらに、間の中に取り残されてしまった「(母)」を心配している。この「僕」の後悔が、「(母)」という表記に込められているんだよ。

⑥ 生徒F：「(母)」は「母」とは異なるVFとしての存在だけれど、一方で同じ見た目であるがゆえに、「ニセモノ」と割り切れない気持ちがある。「(母)」という表記が用いられる背景には、「僕」のこの戸惑いもあると言えるね。

⑦ 生徒G：「(母)」は「母」とは異なるVFとしての存在だけれど、一方で同じ見た目であるがゆえに、「ニセモノ」と割り切れない気持ちがある。「(母)」という表記が用いられる背景には、「僕」のこの戸惑いもあると言えるね。